

27年度版教科書つれづれ 14 「一つの花」(教育出版・小学4年)の巻

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

「一つの花」(今西祐行)は、光村図書・教育出版の小学4年(上)に収録されている物語である。東京書籍では、同じく小学4年(上)に読書教材として収録されている。その意味では、この三社の教科書の中では、準共通教材といってよいだろう。

ここでは、教育出版の教科書での違いを考えていく。といっても、教材本文に変更があるわけではない。では、どこが変わったのだろうか。

一つは、行間である。23年版(以下旧版)では、教材本文は8ページに収められていた。それが27年版(以下新版)では10ページになっている。同じ教材なのだが、行間をあげ、挿し絵を三つから五つに増やすことで、ゆったりと本文がおさめられている。これは以前にも触れたのだが、教育出版の新版に見られる特徴である。読みやすくなったことは評価したい。

旧版は、「一つの花」のはじめに次のような課題が書かれていた。

願いを受け止めて読む

●場面をくらべながら、お父さんやお母さんの思いを考えて読みましょう。

新版は、次のようになっている。

感想を友達に伝えよう

場面をくらべながら、人物の思いを想像して読みましょう。

旧版の手引きの特徴は何と言っても「願いを受け止めて読む」としているところにある。「学習のてびき」の「2」では、「ゆみ子に対する両親の願いや気持ちがわかるところを見つけて、発表し合ひましょう。」とあり、その背後に子どもに対する親の愛を読み取らせるという、道徳的な意図が濃厚に透けて見える。

「一つの花」だけではないが、教科書の文学教材全般に道徳的な読みを強いようとする傾向が見られる。その結果として、子どもたちも道徳的な価値を読みとることを教師が求めていると察知して、それに迎合した読みをしようとする。その傾向は、少なくとも高校までは続いている。個人として読むのであれば、文学作品を道徳的に読むことがあってもよいだろう。しかし、国語の授業で文学作品を道徳的に読むことが、道徳的な価値を子どもたちのものにするにはつながらない。道徳的な授業を展開しても、その結果として子どもの道徳性が向上することにはならない。このように答えておけば先生の評価はよいだろうとか、こういう答えを先生は求めているだろうといった、大人の期待する答えを子どもたちは察知して出しているにすぎない。

以下の文章は「一つの花 父母の願い」というワードでインターネット検索したら出てきたある指導案の中の言葉である。

いつの時代でもどんな状況下でも、両親が我が子の健やかな成長を願うことは普遍的なことであることに気づき、親の子どもに対する愛情を本作品から感じ取ってほしい

旧版の「願いを受け止めて読む」とまさに対応する答えであるといえよう。

確かに、このような読みがまったく成立しないというのではない。そのようにも読める作品ではある。しかし、そのような父母の願いを受け止める読み方をする限り、物語は道徳的になり、子どもたちにとって魅力的なものとはならない。国語の授業が、道徳化していきただけである。なおかつ、物語を読み解く力もついてはいかない。なぜなら「一般的な」父母の願いであるかぎり、それは物語の一語一文に着目して読む必要はないからである。父母が子どもにどんなことを願うのかということ想像すればよいし、どう答えたら教師や父母が喜ぶかといった期待される答えを意識して、子どもたちは答えることになっていく。

新版では、前述したように「願いを受け止めて」とか「お父さんやお母さんの思い」という表現がなくなっただけ、道徳的な読みから一步離れたとはいえる。新版では次のような手引きを設定している。

登場人物の思いを想像しながら、戦争中の場面と十年後の場面をくらべて読み、感想をまとめましょう。

旧版では同じことを「ここが大事」という枠囲みの中で述べているのだが、戦争中と戦後の場面の比較は、たしかに子どもたちにとってはわかりやすいものである。しかし、この作品はそこに一番の中心があるのだろうか。「戦争中の場面と十年後の場面をくらべ」ることは、ともすれば戦争中は食べ物十分になく大変だった、戦後は物が豊かになりよかったといった安易な比較になりやすい。

私はこの作品の構造を次のように読んでいる。

- 冒頭 「一つだけちょうだい。」
|
- 発端 それからまもなく、……
|
- 山場のはじまり ところが、……
|
- ◎——最高潮 「ゆみ。さあ一つだけあげよう。一つだけのお花、大事にするんだよう。」
|
- 結末 一つの花を見つめながら——。
|
- 終わり ……お昼を作る日です。

この作品の主要な事件は戦争中のことである。十年後の場面は終結部であり、あとばなしである。したがって、戦争中と戦後の場面の比較はこの作品の中心にある事件をきちんと読みとることにつながるおそれがある。

むしろ私は、「十年後の場面」がなかった場合のことをここで考える方がおもしろいのではないかと考えている。「一つの花を見つめながら」父が出征していく。そこでこの物語が終わっていたらどうだろうか。

「十年後の場面」があることで、何よりも読者がほっと安心できるのではないだろうか。ゆみ子が無事に成長した姿を見、母子が元気に暮らしている姿を確認することで、そしてコスモスの花につつまれて暮らしている姿をみることで、読者は安心する。お父さんは戦争で亡くなったけれど、お父さんの思いをしっかりと受け止めて、元気に暮らしているゆみ子の姿に、「よかった」と思う

のではないだろうか。

この場面がなく、父の出征で物語が終わっていると、この先母とゆみ子はどうなるのだろうといった不安な気持ちを読者は持つことになる。

この「一つの花」は、戦争によって家族が引き裂かれる悲劇を描いた作品でもあり、ハッピーな心温まる話ではない。しかし、「十年後の場面」が語られることで、読者は悲しみの中にもどこか安心できるものを感じる。悲しくつらい話であるが、それだけに終わらせていない、未来への希望が見えてくるのである。

「十年後の場面」があるのと、ないのとでは、どのように作品の印象が違うかを私ならば考えさせてみたいと思う。また、どちらをよいと思うかを子どもたちに書かせてもおもしろいのではないだろうか。